



ビクトリーサミット小学生ソフトテニス教室



## 下関ソフトテニス スポーツ少年団 **正村 眞弓**さん

36年間にわたり、スポーツ少年団の指導者として数多くの子どもたちの指導・育成に力を注ぎ、下関では女性初となる2021年度「ミズノ スポーツメントール賞」を受賞。正村さんが指導に込める想いとは。



▲選手の育成や、地域スポーツの振興に貢献した指導者に贈られます。

ソフトテニスの楽しさに  
まずは気付いてもらいたい

### 指導者になったきっかけ

学生の頃にソフトテニスと出会った正村さん。最初から指導者になろうと考えていたわけではありませんでした。

「親子で一緒にテニスができたらと思って、子どもをスポーツ少年団に入れたのが最初です。そしたら、『あなたも入らんとだめよ』と言われて、お手伝いという感じで私も入りました。そして、指導者の資格を取るための講習を受けたりしているうちに、抜ければなくなっていました。ぼちぼち辞めようかと思ったこともありましたが、今度は『孫が入るまでがんばって』

### 褒めることで伸ばす 一人一人の個性

「とにかくテニスが嫌いにならないように、特に3年生ぐらいまでは、褒めて褒めて伸ばします」

指導を始めた頃は、基本のフォームを教えることを大切にしていたという正村さん。ある日、変わったフォームでボールを打つ子に出会います。「その子に『こうした方がいいよ』と、正しいフォームを教えました。すると、全く打てなくなりました。その子のやり方では打てるのに、『こうやってごらん』と言うと空振りする。そこで初めて人によってボールを捉える感覚が違う、ということに気が付きました。それもひとつの個性。矯正するよりも、その個性を伸ばしていった方がいいのかなと、今ではそう思っています」



あなたの〇〇な本は何ですか



▶子どもたちを見つめる正村さんの温かいまなざし。



◀正村さんの指導に子どもたちも自然と笑顔に。



▶コツをつかみやすいよう、ゆっくりと体の動きを教えてくださいます。

指導者が絶対に言ってはいけない言葉

指導経験豊富な正村さんでも、教えることは難しいといえます。特に親子で教えるとうまくいかないのだとか。

「親は、自分ができるから教えたら子どももこのぐらいできるだろう、という感覚で見ってしまうのです。すると、『なんでそれができんの』という言い方をするから、親子で教えると、うまくいかないですね。ある大会で出会った親から教えられた経験がある子どもも、『あれは苦痛だった』と話していました」  
正村さんが今大切にしてい

ること。それは、子どもたちにソフトテニスの楽しさを感じてもらおうこと。

「私は『なんでできんの』と絶対に言わないようにしています。初心者の間は褒めて伸ばすのが一番です。一回でも良いボールが打てたらそれでいい。何年か経って試合に出て、負けて悔しいと思うようになったら、そこで『こうしたらいいよ』という教え方をすれば、どんどん上手になると思います」

下関ソフトテニススポーツ少年団では、小学1年生から6年生の子どもたちが活動しています。ぜひ一緒に汗を流してみてもいかがでしょうか。

Editor's note 編集後記

■移動図書館は、ちょっとした交流の場になっていました。「元気しちやるかね?」孤立感の解消にもつながればいいですね。宮村  
■「赤江美学」に魅了されました。京都を舞台にした作品が多い中、下関で執筆活動を続けられた赤江瀬さんの下関愛を感じます。廣野  
■理系の研究をする人に憧れます。高橋杏弥さんに感化され「ちゃんと学問を修めておけばよかった」と後悔。うん、時間はもう戻らない! 西村